

## <外科系診療部門>

### 小児外科

今年度は、新病院に移転後の実績が問われる年であった。幸いにして周産期センター(さいたま赤十字病院産科、当院 NICU)の稼働が堅調に推移し、併せて新生児外科疾患の症例も順調に増加した。旧病院からご紹介頂いている医療機関からは、変わらずご紹介いただき、更に移転後に近隣の医療機関からの紹介も増えてきており、より一層近隣の医療機関と連携を緊密に進めていきたい。他院小児外科施設との協力関係は、県内の小児外科医が定期的集まり、症例を共有することが継続的に行われ、小児外科関連の施設と緊密な連携を行った。

当院で重点的に行っている内視鏡手術については、内視鏡手術数の増加はないものの、より重症疾患への手術が行われており、今後も県民の皆様へ低侵襲手術を提供していく所存です。

平成 29 年度(平成 29 年 4 月-平成 30 年 3 月)の外来患者総数は 6055 名、うち新来患者は 694 名であった。前年度に比べて総数では 3 名減少し、新患数は 107 名減少した。入院患者総数は 851 名で、前年より 25 名増加した。患者平均在院日数は 7.02 日と前年度より 0.58 日短縮した。入院患者、緊急手術、内視鏡手術の年齢分布は表 1 の如くであった。新生児数は前年度より 1 名増加し 46 名であった。

平成 29 年度の入院患者の主たる疾患別分布、手術の内訳を表 2 に示した。鼠径ヘルニアは嵌頓を含め 229 名で最も多く、うち 214 例が手術を受けた。新生児疾患では、鎖肛(17 例)が最も多く、ヒルジュスプルング病(7 例)、食道閉鎖症(6 例)、腸回転異常症(12 例)、腸閉鎖症(13 例)が続いた。横隔膜ヘルニアは 1 例、その他壊死性腸炎(5 例)などで、総合周産期母子医療センターの設置に伴い、出生前診断に基づいて周産期センターへ母体搬送された症例が認められる様になった。悪性腫瘍は、神経芽腫群腫瘍が 6 例、肝腫瘍が 3 例、奇形腫群も 5 例と例年より減少傾向となった。肝胆道疾患で、胆道拡張症では 5 例に手術が行われ、全例で内視鏡手術が実施された。

年間総手術件数は 782 件、緊急手術は 255 件であった。前年に比べ総手術件数は 44 件減少したが、緊急手術は 37 件増加した。手術総数は減少しているものの、新生児手術数や、重症患者の手術件数、緊急手術件数が増加しており、新病院移転後の疾患分布の変化がみられた。内視鏡手術は 347 件に行われ昨年と比較して 19 件増加し、単孔式腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術(SILPEC)、虫垂炎、噴門形成術に加え、その他の疾患の多くに内視鏡手術が導入された。内視鏡手術の内訳として、鼠径ヘルニア根治術(214 件)、虫垂切除術(40 件)、噴門形成術(13 件)、漏斗胸に対する NUSS 手術(6 件)、胸腔鏡下肺部分切除・完全胸腔鏡下肺葉切除術(5 件)、鎖肛に対する腹腔鏡補助下造肛術(2 件)、胆道拡張症に対する根治術(5 件)、などがあげられる。

新生児外科症例は、新病院で総合周産期母子医療センターの設置により周産期医療体制が強化され、新生児手術数の増加がみられた。総合周産期センターと協力し、prenatal visit を積極的にを行い出産前に胎児の疾患に対する治療の計画など行っている。今年度からは、さいたま赤十字病院と協力し生体肝移植の開始に向けて準備を進めており、再来年度に移植医療の開始を目指している。

(川嶋 寛)

スタッフ

- 川嶋 寛 (科長兼副部長、日本小児外科学会専門医、指導医、日本外科学会専門医、日本内視鏡外科学会技術認定医(小児外科部門)、日本内視鏡外科学会評議員、日本がん治療認定医機構暫定教育医、小児がん治療認定外科医)
- 石丸哲也 (医長、日本小児外科学会専門医、指導医、日本外科学会専門医、小児がん治療認定外科医平成 29 年 4 月から)
- 田井中貴久 (医長、日本小児外科学会専門医、指導医、日本外科学会専門医、平成 29 年 9 月～平成 30 年 6 月まで)
- 星野論子 (医員、日本外科学会専門医、平成 29 年 12 月～平成 30 年 7 月まで)
- 鈴木啓介 (医員、日本外科学会専門医、平成 29 年 11 月まで)
- 高見尚平 (医員、日本外科学会専門医、平成 30 年 3 月まで)
- 柿原 知 (医員、日本外科学会専門医、平成 28 年 10 月から)
- 加藤怜子 (医員、日本外科学会専門医、平成 29 年 4 月から)
- 青山統寛 (レジデント、日本外科学会専門医、平成 29 年 4 月から)

表1 入院患者数、緊急入院、内視鏡の年齢分布

年齢	1ヶ月未満	1-12ヶ月	1-5歳	6-11歳	12-15歳	16歳以上	総計
患者数	46	120	344	202	98	41	851
比率(%)	5.4	14.1	40.4	23.7	11.5	4.8	100
内視鏡	10	45	158	103	26	5	347
比率(%)	2.9	13	45.5	29.7	7.5	1.4	100
緊急入院	14	10	21	34	14	8	101
比率(%)	13.9	9.9	20.8	33.7	13.9	7.9	100
緊急手術	55	42	52	69	26	11	255
比率(%)	21.6	16.5	20.4	27.1	10.2	4.3	100

表2 入院患者の主たる疾患別分布、手術の内訳

疾患名	患者数	手術計	内視鏡	病名1	患者数	手術計	内視鏡
新生児疾患(新生児期に治療していないものも含む)				その他の疾患			
横隔膜ヘルニア	2	1	1	鼠径ヘルニア・水瘤	229	214	214
食道閉鎖	12	6	5	臍ヘルニア	34	44	
食道閉鎖術後	4	13		腹壁ヘルニア	2	2	
腸閉鎖、狭窄	8	13		停留精巣	25	31	1
腸回転異常	10	12		GER	19	13	7
ヒルシュ	19	7	5	GER術後	4	3	
ヒルシュ術後	4	3		虫垂炎	51	43	40
ヒルシュ類縁	3	3		PS	12	12	11
低位鎖肛	11	11		腸重積	25	25	8
中間位、高位鎖肛	9	6	2	側頭、梨状窩瘻・嚢胞	11	4	
鎖肛術後	10	6	1	門脈異常	2	2	2
NEC/LIPS	1	3		胆道閉鎖	5	2	1
胎便性腹膜炎	4	5		胆道閉鎖術後	5		
				胆道拡張症	13	5	5
				胆道拡張症術後	3		
				膵炎	3		
腫瘍性疾患				イレウス	22	24	2
神経芽腫	4	6	4	炎症性腸疾患	3	2	1
肝腫瘍	5	3		漏斗胸	8	6	2
奇形腫群	18	5	1	気管	6	18	
リンパ管腫血管腫	12	10		気道異物	3	3	
メッケル	1	2	2	外傷	8	2	
縦隔	5	4	2	肺	12	11	2
卵巣嚢腫	7	7	1	結石	7	2	1
悪性腫瘍(その他)	13	21	3	自然気胸	7	3	3
				食道狭窄	7	5	
				正中頸瘻・嚢胞	3	1	
				腸炎、腸間膜リンパ節炎	2	2	
				尿管	9	8	
				皮膚・皮下腫瘍	11	19	1
				肛門病変	3	3	
				短腸症候群	53	3	
				・脾臓	1		
				腹痛精査	2		
				その他(CV挿入等)	79	123	19
				総計	851	782	347

## 心臓血管外科

平成 29 年度の心臓血管外科手術総数 194 件(手術死亡 1)であった。内訳は体外循環未使用手術(主に動脈管開存、シャント、肺動脈絞扼など姑息術) 49 例、体外循環使用手術 114 例(手術死亡 1)、心大血管手術は 163 件であり、その他(ECMO 導入、肺生検、ペースメーカー等) 31 件であった。年齢分布は新生児 42 例(21%)を含む乳児症例 94 例(49%)が約半数を占めた。救命できなかった症例は手術死亡 1 例の他に、在院死亡 3 例、ECMO 離脱困難例 2 例であった。

周産期医療が軌道に乗り重症複雑心奇形児の診療機会が急増した。TAPVR 合併 HLHS、MAPCA 合併 TAPVR など、蓮田では経験しなかった重症例に対する垂直静脈ステント留置、TAPVR 修復+MAPCA banding など新しい術式を要する重症疾患群を経験した。また左室-大動脈トンネル症に対して日赤にて帝王切開娩出直後、当センター手術室に搬送し出生から 2 時間で体外循環を確立し救命しえた症例も経験した。当センター、日赤の両院のチーム連携による重症救命であった。一方、救命困難であった気道疾患合併例や、重症胎児診断例に対しては経験を蓄積していくと共に、手術時期、術式などの治療戦略面での課題を認識できた。

キャリアオーバー例や成人先天性心疾患に対する両院連携は移転前からの課題であったが、30 代症例に対する右房憩室切除術、40 代症例の膜様中隔瘤を伴った大動脈弁逆流に対する弁置換手術など、日赤成人心臓外科医と我々小児心臓外科医が合同介入する症例を経験した。今後、心内修復後のファロー四徴症、総動脈幹症などに対する肺動脈弁置換術へも連携を拡大していく計画である。

周産期医療による疾患の重症化、成人先天性疾患への適応拡大に伴って、更なるチーム連携強化と成績向上を目指したい。

(野村耕司)

### 『スタッフ』

- \* 野村 耕司 (部長兼科長 日本胸部外科学会指導医、日本心臓血管外科専門医、日本外科学会専門医、日本外科学会指導医)
- \* 黄 義浩 (副部長 日本心臓血管外科専門医、日本外科学会専門医、日本外科学会指導医)
- \* 木南 寛造 (医員 日本外科学会専門医)
- \* 高木 智充 (医員 日本外科学会専門医)
- \* 川村 廉 (レジデント)

表1 体外循環使用例

	28日未満	～1歳未満	～18歳未満	18歳以上	計	備 考
完全大血管転位症	2				2	ASO:2(Aortic sinus pouch)
大動脈弓離断複合	1	1			2	
肺動脈閉鎖症	1				1	
総肺静脈還流異常症	4(1)				4(1)	
心房中隔欠損症			16	1	17	
肺静脈還流異常症合併			1		1	
不完全型房室中隔欠損症			2		2	
完全型房室中隔欠損症		5	1		6	
心室中隔欠損症		26	15		41	
肺動脈狭窄症合併		1			1	
ファロー四徴症	1		7		8	
両大血管右室起始症			1		1	Rastelli:1
BWG症候群						
単心室						
Ebstein奇形						
修正大血管転位症		1			1	UF Center PA plasty+BT:1
右室二腔症						
その他	1	4	20	2	27	LV-Ao tunnel:1 RVOT再建ほか
計	10(1)	38	63	3	114(1)	

( )手術死亡数

表2 体外循環未使用例

	28日未満	～1歳未満	1歳以上		計	
動脈管開存症	18	2	1		21	超未:14
大動脈縮窄/離断	4	2	1		7	Bil PAB:4
肺動脈閉鎖	2	1			3	
心房中隔欠損症		1			1	高度肺高血圧:1
心室中隔欠損症						
ファロー四徴症	1	1			2	BT:1
三尖弁閉鎖症	1				1	BT:1
房室中隔欠損症	3	2			5	PAB:5
両大血管右室起始症		1			1	
左心低形成症候群	1				1	
その他	3	5			8	Truncus:Bil PAB
計	32	15	2		49	

( )手術死亡数

## 脳神経外科

平成 29 年度の脳神経外科診療は常勤医 2 名（脳神経外科学会専門医）、レジデント 2 名の 4 名で行った。各レジデントの任期は 3 カ月である。

外来部門は年間延べ患者総数 3493 名、新患総数 157 名、再来患者総数 3336 名で、例年より減少した。再来患者数の減少は年長児の逆紹介を推進した結果と考える。

入院部門は入院延べ患者総数が 152 名で昨年度と変化はなく、疾患別では中枢神経系奇形 45%、脳脊髄腫瘍 21%、頭部外傷 3%、脳血管疾患 19%で、前年と比較して脳脊髄腫瘍と脳血管疾患の比率が増加した。年齢別では新生児・乳児 24%、1-2 才 26%、3-6 才 17%、7 才以上 33%で 1-2 才の幼児症例の比率が高かった。平成 29 年度は脳脊髄腫瘍の増加が特徴であった。

手術総数は 127 件と大幅に増加した。手術術式別では脳腫瘍摘出術 24 件、脊髄脂肪腫摘出術 11 件、EDAS/EMS11 件、脳室腹腔吻合術 10 件、頭蓋顔面形成術 10 件と脳腫瘍摘出術やもやもや病に対する脳血行再建術が多い年だった。神経内視鏡手術等の低侵襲手術は今年度も増加傾向で、平成 29 年度から稼働したニューロナビゲーションシステム支援下手術も 38 件行った。今後、更なる低侵襲で安全な手術を目指し最先端の診療を行っていきたいと考えている。

本年度は外来患者数が減少したものの入院患者数は維持され、手術件数が増加していることから外科診療に特化した診療が行えたと考える。また脳腫瘍症例や乳幼児症例が増加したことは、小児病院脳神経外科としての役割が十分に果たせた 1 年であったと考える。

（栗原 淳）

### スタッフ

栗原 淳	（科長兼部長 脳神経外科学会専門医）
落合 祐之	（医員 脳神経外科学会専門医）
山室 俊	（医員 脳神経外科学会専門医）

表-1入院患者疾患別・年齢別内訳(平成28年度)

疾患	新生児	乳児	1-2才	3-6才	7才-	計
<b>1.中枢神経系奇形</b>						
先天性水頭症		2	1	2	3	8
全前脳胞症						
Dandy-Walker奇形						
脊椎破裂		1				1
脊椎破裂+水頭症		1			1	2
頭蓋破裂		5	4			9
頭蓋破裂+水頭症						
脊髄脂肪腫		16	1	4	1	22
先天性皮膚洞・皮様嚢腫				1		1
Thight Filum Terminale						
脊髄空洞症			1		2	3
くも膜嚢腫・頭蓋内嚢胞性疾患		2	4		1	7
先天性頭皮・頭蓋骨欠損						
狭頭症・頭蓋顔面奇形		2	11	3	2	18
<b>2.脳脊髄腫瘍</b>						
大脳半球腫瘍	1		2		4	7
脳室内腫瘍						
脳幹部腫瘍			2		1	3
鞍上部・視神経腫瘍			1		4	5
小脳・第4脳室腫瘍		1	1	2	1	5
松果体部腫瘍					3	3
眼窩内腫瘍						
頭蓋骨腫瘍			5	1		6
脊髄腫瘍		1		2	1	4
<b>3.頭部外傷</b>						
慢性硬膜下血腫		2			1	3
急性硬膜下血腫			1			1
急性硬膜外血腫			1			1
硬膜下血腫(分娩時)						
脳挫傷・脳内血腫						
びまん性白質損傷						
頭蓋骨骨折						
頭血腫・帽状腱膜下血腫						
脳震盪・頭部外傷後症候群						
外傷性水頭症						
外傷性脳血管疾患						
<b>4.脳血管疾患</b>						
脳室内出血後水頭症		1				1
脳梗塞						
もやもや病			2	5	15	22
脳動静脈奇形			1		5	6
脳動脈瘤					1	1
出血性素因による頭蓋内出血						
<b>5.炎症性疾患</b>						
髄膜炎後水頭症			1		1	2
頭蓋骨骨髓炎						
脳膿瘍					2	2
硬膜下膿瘍						
脳・髄膜炎・脳炎						
<b>6.その他</b>						
		1	1	6	1	9
計	1	35	40	26	50	152

表-2手術数(平成29年度)

脳室-腹腔吻合術	10
脳室-心耳吻合術	0
硬膜下腔-腹腔吻合術	2
嚢腫-腹腔吻合術	0
空洞-くも膜下腔吻合術	0
脳腫瘍摘出術	24
眼窩内腫瘍摘出術	0
脊髄腫瘍摘出術	4
頭皮・頭蓋骨腫瘍摘出術	5
くも膜嚢腫開放術	1
頭蓋内血腫摘出・除去術	
硬膜下血腫	2
硬膜外血腫	1
脳内血腫	0
脳動静脈奇形摘出術	2
脳動脈瘤根治術	0
EDAS/EMS	11
脊椎破裂根治術	4
脊髄脂肪腫摘出術	11
先天性皮膚洞摘出術	0
頭蓋破裂根治術	6
頭蓋形成術	4
頭蓋顔面形成術	10
上位頸椎・後頭蓋窩減圧術	3
開頭・排膿ドレナージ術	3
脳室リザーバー・マッカムチューブ装着術	5(9)
穿頭・脳室ドレナージ術、硬膜下ドレナージ術	6(11)
穿頭・頭蓋内圧センサー装着術	3
神経内視鏡手術	7(10)
選択的脊髄後根切断術	3
血管内手術	0
計	127

( )内、同時手術における延べ手術数



## 整形外科・リハビリテーション科

平成 29 年度の外来新患数は 723 人で、例年より約 100 名増加した。疾患別では股関節疾患が最多で、次いで先天性疾患が多くみられた。手術件数は 390 件（臨時手術 37 件、緊急手術 46 件）であった。新病院移転後の ER 設立の影響で骨折が激増した。骨折手術が例年 20~30 件前後であるが、82 件となった。上腕骨顆上骨折が最多であった。平成 22 年度に開始した脳性麻痺患児の痙性尖足、斜頸、に対するボツリヌス注射も施注機会を増加している。それに伴って脳性麻痺患児に対する筋解離手術も増加した。

## 形成外科

平成 29 年 1 月より新病院が開院し、新患総数が増加した。また、救急外来が創設されて、外傷患者の受け入れに伴い、形成外科にコンサルトされる患者も増加した。外傷・熱傷患者の新患数は、平成 28 年度が 54 件だったのに対して、平成 29 年度は 113 件と約 2 倍となった。手術件数も大幅に増加したが、形成外科のみならず、他科の患者も増加したため、ベッド不足に悩まされる事態が生じた。最も懸念されていた夏休みは、「チャタテムシ騒動」で手術制限されたために、ベッドコントロールの混乱はなかった。ただし、毎日・毎週、綱渡りの手術調整が必要となり、現場のスタッフは大変苦労した。また、予定日を変更せざるを得なかった患者・家族には大変迷惑をかけたことと思われる。平成 29 年度は、スタッフ内で大きな変化があった。一つは、渡邊院長補佐が 4 月に副院長に就任され、渡辺あずさが科長を拝命した。そのため、実質的な臨床医が一人減る事となり、個人当たりの仕事量は増加した。また、1 月に形成専門医資格を取得した宇都宮医師が 6 月末で異動となってしまったことによる戦力ダウンは痛手であった。しかしながら、8 月より防衛医大からの研修生が短期交代で派遣されることとなり、戦力として多いに助かった。平成 29 年度は佐々木医師 1 名が 4 ヶ月間だけの派遣であったが、平成 30 年度からは、断続的に研修生が派遣される予定であり、期待している。

(渡辺あずさ)

## スタッフ

渡邊彰二 (副院長 日本形成外科学会専門医 皮膚腫瘍外科指導医)  
渡辺あずさ (科長 日本形成外科学会専門医)  
加藤 基 (医員 日本形成外科学会専門医)  
宇都宮裕己 (専攻医 日本形成外科学会専門医 H28 年 10 月～H29 年 6 月)  
横山貴之 (専攻医 平成 29 年 4 月～)  
渡辺太郎 (専攻医 平成 29 年 7 月～)  
佐々木矢恵 (専攻医 平成 29 年 8 月～11 月)

表1. 新規患者疾患内訳

疾患名	平成 29 年度
新患人数 (人)	943
疾患総数 (例)	1003
頭蓋顎顔面の異常	26
眼 (眼瞼下垂・内反等)	11
耳の異常	122
鼻の異常	2
口唇口蓋裂	104
口唇裂以外の口の奇形	12
鼻咽腔閉鎖機能不全	10
手足・爪の奇形	74
体幹の異常	17
良性皮膚腫瘍・軟部腫瘍	103
悪性皮膚腫瘍	2
いちご状血管腫	103
単純性血管腫	60
先天性血管腫	10
その他の血管腫	7
血管奇形	9
リンパ管腫・リンパ管奇形	19
色素性母斑	47
扁平母斑	26
太田母斑	5
異所性蒙古斑	28
脂腺母斑・表皮母斑	36
外傷	73
熱傷	40
瘢痕拘縮	22
褥瘡・難治性潰瘍	3
その他	32

表2. 2017年度 手術件数

疾患分類		全麻	局麻	合計
I 外傷	上肢の外傷	2	0	2
	顔面軟部組織損傷	1	0	1
	顔面骨折	8	0	8
	熱傷・凍傷	8	0	8
	頭部・頸部・体幹の外傷	6	0	6
II 先天異常	頭蓋・顎・顔面の先天異常	107	2	109
	唇裂・口蓋裂	125	3	128
	体幹(その他)の先天異常	3	0	3
	四肢先天異常	64	0	64
III 腫瘍	良性腫瘍	159	32	191
	腫瘍切除後の組織欠損	1	0	1
	腫瘍の続発症	1	0	1
IV 瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド	瘢痕拘縮	11	1	12
	ケロイド・肥厚性瘢痕	3	2	5
V 難治性潰瘍	その他の潰瘍	2	0	2
VI 炎症・変性疾患	四肢	4	0	4
	顔面・頸部	0	0	0
	体幹	5	0	5
VII その他		2	0	2
レーザー	Vビーム	32	180	212
	Qスイッチルビー	18	63	81
総数		562	283	845

## 泌尿器科

手術：全手術件数 406 件で昨年度に比べ、37 件増加となった。このうち腹腔鏡下手術が 31 件（7.6%）で尿路内視鏡下手術が 97 件〈24%〉を占めた。1.早期離床、2.入院期間短縮、3 整容性の向上を目的として、これら腹腔鏡下手術と尿路内視鏡手術を中心に DJ 尿管ステント法や二重オムツ法などを多用して、低侵襲手術の拡大、増大、開拓をさらに進めていくつもりである。また腹腔鏡や尿路内視鏡の器具の進歩、ステント類の縮小化などにより、先天性の小児手術においても腹腔鏡と尿路内視鏡を併用したある意味での Hybrid 手術が、今後さらに発展するものと考えている。症例を重ねて有用性、安全性を報告していきたい。

尿路内視鏡手術のメインである膀胱尿管逆流へのヒアルロン酸注入術は保険収載後、約 8 年で 220 症例 300 尿管数を超え、治療成績も良好であり、数多くの御紹介を頂いている。また最近の傾向として尿路結石症の増加が著しく、治療のみならず、結石産生予防についても重要なテーマとなっている。

腹腔鏡下手術で最多の非触知精巣（腹腔内精巣）手術も 330 症例を超えて 120 精巣以上の腹腔内精巣の治療も行った。各方面から評価を頂いている。

水腎症に対する腎盂形成術は乳児期では小切開開腹手術、幼児以降では腹腔鏡下手術を施行している。これは患児の負担を最小限とし、各術式の長所を最大限に利用するためである。

手術における目標到達点は①治療の確実性があること、②低侵襲性であること、③手術麻酔の反復性が少ないこと、④レントゲン被爆量が極力ないこと、⑤保険適応があることと考えている。

病棟：手術以外の入院理由は i 尿路奇形精査、ii 神経因性膀胱児の間欠導尿もしくは間歇自己導尿手技獲得目的および iii 性分化疾患へのホルモン負荷試験目的などであった。

スタッフ：多田実 後藤俊平 植草省太 渡邊揚介 家崎朱梨

非常勤医（外来&UDS を中心に）

小林堅一郎 堀祐太郎

非常勤医（手術を中心に）

大橋研介 入江有紀

表 平成 29 年度手術件数の内訳

( ) 腹腔鏡下手術  
 < > 尿路内視鏡下手術

①腎臓

腎盂形成術	8 (5)
腎摘除術	2 (1)
腎婁造設&交換	2

②尿管&膀胱

逆流防止式尿管膀胱新吻合術	27
内視鏡的逆流防止術	31 <31>
尿管瘤切開術	4 <4>
代用膀胱造設術 studer 法	1
膀胱鏡検査	58 <58>

③尿道

尿道下裂初回形成術	41
尿道下裂婁孔閉鎖&修正	5
尿道狭窄拡張術	4 <4>
真性包茎手術	36

④性腺

精巣固定術	95 (21)
精巣摘除術	5 (4)
精索静脈瘤手術	5

その他

83

全手術件数	406 件
腹腔鏡下手術	31 件 (7.6%)
尿路内視鏡下手術	97 件 <24%>

## 耳鼻咽喉科

平成 29 年度は、常勤の浅沼聡、安達のどかの 2 名に加えて大学医局より非常勤として吉川弥生先生、坂田阿希先生、9 月から今井直子先生が一般外来を担当しました。

新病院へ移転後、地理的な関係と思いますが県南部地域からの紹介患者が増加しています。特に全身麻酔下で切開・排膿が必要な頸部膿瘍の患者さんが増加しており、関係各科と協力して治療を行っています。切開・排膿の手術は当科の担当ですが、全身管理と点滴治療は集中治療科および感染免疫科にお願いしています。また院内各科からの気道評価目的の診察依頼も増えています。往診の場合にはできる限り外来からビデオスコープシステムを移動して、主治医の先生方とスコープ画面を供覧し所見を共有しています。また旧病院では耳鼻咽喉科外来から離れた場所にあった補聴器外来を、耳鼻咽喉科外来内に設けました。言語聴覚士と患者さんについての情報および意見交換がリアルタイムでできるようになり、診療の質の向上につながっています。

当科はこれまで通り、小児耳鼻咽喉科疾患全般にわたり診療していますが、とくに小児難聴の早期発見・療育、いびきと睡眠時無呼吸の診断・治療、在宅気管切開管理の 3 本柱があります。一般外来のほかに 7 つの専門外来があり、新生児聴覚スクリーニングで発見された 1 歳までの乳児を対象とした難聴ベビー外来（含音楽療法）、加我外来、人工内耳外来（山岨教授）、補聴器外来、在宅気管切開管理などの気管切開外来、気管・喉頭外来（東大二藤講師）、サイトメガロウイルス（CMV）外来（東大小児科岡明教授）などがあります。

当院は新生児聴覚スクリーニングで要再検となった児の精密聴力検査実施機関に指定されており、生後 6 日からの新生児・乳児が多数紹介されています。生理検査室の協力を得て、産院から紹介初診となった当日に ABR を実施し、結果の説明をしています。予約をして後日 ABR を実施する施設がほとんどである中、即日の ABR 実施は当院の特徴の一つでもあります。受診してから検査までの時間が長いと、その間ご両親とりわけ出産後まもないお母様が不安になることがわかっており、それに配慮して生理検査室の協力を得て即日実施をしています。検査結果で両側 50dB 以上の感音難聴と判明した場合には、難聴ベビー外来で対応をしています。早期の難聴原因検索、聴覚管理、補聴器の調整、その後の療育機関との連携、両親への精神的サポートを、小児科医、言語聴覚士、看護師、社会福祉士、音楽療法士などの助けを得てチーム医療として行っております。難聴ベビー外来は月一回の 1 2 回コースですが、平均 20～25 人くらいの参加者がいます。

いびき・無呼吸で紹介となった児は、問診に続いて扁桃肥大・アデノイド増殖症、鼻閉などの所見の有無を精査し、全員にアプノモニターを実施、必要がある児にはポリソムノグラフィーを実施して客観的な評価を行い、手術適応を判断しています。紹介患者の増加とともに睡眠時無呼吸症候群に対する手術（アデノイド切除術・両側口蓋扁桃摘出術）件数も近年増加しています。近年は、リスク（3 歳以下、合併症、頭蓋顔面形態異常等）のある児についても、適応があれば関係各科と協力して手術適応としています。

近年、在宅管理となる気管切開および喉頭気管分離術後の患者さんが増加しています。小児では肉芽ができてやすいため、特に重心の患者さんで側弯症および胸郭の変形が進行している患者さんは、気管カニューレの選択が難しいこともあります。安心して在宅での生活が送れるように関係各科およびコメディカルスタッフと協力して診療を行っています。

(浅沼 聡)

### スタッフ

浅沼 聡 (科長兼部長)

安達のどか (医長、日本耳鼻咽喉科学会専門医)

表 2017年度手術件数 (350件、外来手術を含む)

①耳手術 (199件)	
鼓室形成術	15
試験的鼓室開放術	3
先天性耳瘻孔摘出術	10
副耳切除術	4
ステロイド鼓室内注入術	3
鼓膜チューブ留置術 (全麻)	66
鼓膜チューブ留置術 (外来)	98
②鼻手術 (5件)	
上顎洞後鼻孔ポリープ切除術	1
下鼻甲介切除術	1
後鼻孔閉鎖症手術	1
鼻腔粘膜焼灼術	1
その他	1
③口腔・咽頭・喉頭・頸部 (146件)	
両側口蓋扁桃摘出術&アデノイド切除術	67
両側口蓋扁桃摘出術	32
アデノイド切除術	10
頸部膿瘍切開排膿術	10
喉頭微細手術	5
舌小帯形成術	3
中咽頭腫瘍切除術	3
気管孔閉鎖術	2
正中頸嚢胞摘出術	2
下口唇嚢胞摘出術	2
術後出血止血術	2
その他	8



## 眼科

平成 29 年度は、前年度と同じく常勤医師 2 名、レジデント 1 名での診療体制となった。

外来：外来新患数とその疾患内容を表 1 に示す。

今回は、平成 28 年 12 月 27 日移転後初の新病院単独年間集計である。移転前後の外来制限をおこなった前年度と比較すると、新患数内訳の対前年比で全身疾患による眼障害 1.4、斜視弱視 1.5 であった。

入院および手術：入院患者数と疾患内訳を表 2 に示す。手術数は対前年比 1.4 であった。手術内容については例年と同様の傾向であった。

未熟児網膜症の発生状況：レーザー治療を施行した未熟児網膜症は 8 眼であった。総合周産期母子医療センターの整備に伴う病床数の増加によりレーザー数は増加した。

### スタッフ

神部 友香（医長 日本眼科学会専門医）

大山 祐佳里 平成 29 年 4 月～平成 29 年 12 月（医員）

三浦 真里亜 平成 30 年 1 月～（医員）

西本 亜里香 平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月（レジデント）

（眼科 神部 友香）

表 1. 外来新患疾患別内訳（平成 29 年度）

疾患名	症例数	疾患名	症例数
屈折異常	44	結膜炎	3
全身疾患による眼障害	201	青色強膜	1
斜視、弱視	354	眼球運動障害	1
脳内疾患による眼障害	10	結膜疾患	3
睫毛内反	32	眼瞼縮小症候群	2
涙器疾患	35	眼瞼下垂	25
眼振	21	ヘルモイド	3
未熟児網膜症	19	霰粒腫	15
心因性視力障害	13	麦粒腫	2
白内障	12	眼窩腫瘍	5
角膜疾患	9	眼瞼腫瘍	6
ぶどう膜異常	4	網膜芽細胞腫	2
網膜疾患	10	調節機能不全麻痺	2
視神経疾患	5	白皮症	1
緑内障	1	羞明	1
ぶどう膜炎	2	色覚異常の疑い	8
		合計	852

表 2. 入院患者の内訳（平成 29 年度）

	症例数
外斜視	76
内斜視	27
他の斜視	12
眼瞼内反症	41
霰粒腫	14
結膜腫瘍	3
涙道閉塞	16
眼瞼デルモイド	1
眼球摘出術	1
白内障	10
網膜疾患に対する網膜光凝固術	12
全麻下検査	4
計	217

## 皮膚科

現在常勤医師 2 人体制で週 5 日の診療を行っている。

外来では主にアトピー性皮膚炎を含めた湿疹皮膚炎群および血管腫・血管奇形や太田母斑・異所性蒙古斑などの疾患がおおくみられる。昨年に引き続きレーザー外来を設けて診療にあたった。

また、入院による全身麻酔下でのレーザー治療および手術も行っている。

さらに入院中の患児の様々なスキントラブルに対しての往診も積極的に行い、今後も継続していく方針である。

表 1 に平成 29 年度の初診患者の疾患内訳を示す。

(玉城善史郎)

スタッフ

玉城 善史郎 (科長兼副部長)

須永 真司 (医員)

表 1 初診患者疾患内訳

疾患群	患者数	疾患群	患者数
湿疹・皮膚炎群	87	付属器疾患	37
蕁麻疹・痒疹・皮膚そう痒症	9	母斑と神経皮膚症候群	92
紅斑・紅皮症	6	血管腫・血管奇形	120
薬疹・GVHD	5	異所性蒙古斑・太田母斑・扁平母斑	91
血管炎・紫斑・脈管疾患	4	色素性母斑	76
膠原病及び類縁疾患	8	良性腫瘍	100
物理化学的皮膚障害・光線過敏	10	ウイルス感染症	21
水疱症・膿疱症	0	真菌感染症	2
角化症	4	細菌感染症	4
色素異常症	12	虫刺症など	2
真皮・皮下組織の疾患	9	その他	4
		合計	703

## 小児歯科

平成 29 年度の歯科業務は、常勤の専任歯科医師である高橋康男（歯科科長、日本小児歯科学会専門医指導医、日本障害者歯科学会認定医）、日本大学歯学部小児歯科学講座より週 2 日派遣の黒木洋祐（非常勤歯科医師、日本障害者歯科学会認定医）および週 1 日派遣の伊藤寿典（非常勤歯科医師）が診療業務にあたった。外来診療日については、月曜日、火曜日、水曜日（第 1・第 3 水曜日は午前のみ）および金曜日の午前・午後、第 3 木曜日を除く木曜日の午前、計週 5 日間行った。歯科衛生士は、渋谷美保、佐藤康子、肥沼順子、岡田美佳の 4 名と 9 月より佐久間貴子、10 月より田中淳子が歯科診療補助、外来受付業務を行った。毎月第 1 木曜日午後、実施されているもぐもぐ外来（多職種プログラム外来）には専任歯科医師の高橋が診療に参加し、摂食に関連する歯科領域の指導を行った。

平成 29 年度の診療実日数は、計 215（前年度 218；以下のカッコ内は前年度の数とする）日で前年度より減少し、診療延べ患者数も計 3,902（3,997）名と前年度より減少した。1 日平均患者数は、18.1（18.3）名で前年度と比較し、減少した〔表 1〕。年間初診患者数においては 273（213）名で月平均 22.8（17.8）名と前年度と比較し、増加した〔表 2〕。院内初診患者は、各診療科からの紹介を原則とし、その内訳は外来 218（167）名、入院 55（46）名であり、初診患者は外来、入院とも増加した。紹介診療科別内訳は、遺伝科 100（85）名と最も多く、ついで血液・腫瘍科 42（31）名、以下、神経科 15（9）名、形成外科 13（11）名、総合診療科 10（10）名、救急科 10（2）名およびその他であった〔表 3〕。

平成 29 年度の当科における主な業務内容は、従来通り齲蝕と歯周疾患の予防と処置が中心であった。想定通り、救急科よりの依頼も増加した。また、口腔外科処置については、埼玉医科大学総合医療センター歯科口腔外科からの応援医により延べ 22 名行われた。さらに、矯正科医による顎顔面領域に問題のある患児に対しての歯列矯正は延べ 9 名だった。

そして、全身麻酔下での歯科処置は 10 件行った。

（高橋 康男）

### スタッフ

高橋康男（科長兼副部長、日本小児歯科学会専門医指導医、日本障害者歯科学会認定医）  
 黒木洋祐（非常勤歯科医師、日本障害者歯科学会認定医）  
 伊藤寿典（非常勤歯科医師）

表1 月別診療実日数・診療延べ患者数・1日平均患者数(平成 29 年度)

項目	年	平成 29 年										平成 30 年			合計
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
診療実日数(日)		18	15	21	18	19	17	19	17	18	16	18	19	215	
診療延べ患者数(名)		335	300	347	334	337	336	341	309	334	273	292	364	3902	
1日平均患者数(数)		18.6	20.0	16.5	18.6	17.7	19.8	17.9	18.1	18.6	17.1	16.2	19.2	平均 18.1	

表2 月別初診患者数(平成 29 年度)

項目	年	平成 29 年										平成 30 年			合計
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
診療延べ患者数(名)		16	18	36	24	19	28	20	21	21	23	22	24	273	
		年間平均： 22.8 名／月													

表3 初診患者の病棟別・疾患別内訳(平成29年度)

外来・入院別および病棟別内訳		紹介科別内訳			
		内科系		外科系	
● 外来	合計 218 名	血液・腫瘍科	42 名	小児外科	7 名
		神経科	15 名	心臓血管外科	1 名
● 入院		精神科	5 名	脳神経外科	4 名
PICU	2 名	代謝・内分泌科	5 名	整形外科	3 名
HCU	8 名	腎臓科	6 名	皮膚科	名
NICU	名	遺伝科	100 名	耳鼻咽喉科	4 名
GCU	1 名	感染・免疫科	8 名	形成外科	13 名
9A	3 名	アレルギー科	1 名	眼科	1 名
9B	1 名	循環器科	8 名	泌尿器科	1 名
10A	19 名	総合診療科	10 名	麻酔科	名
10B	4 名	未熟児・新生児科	4 名	放射線科	名
11A	2 名	消化器・肝臓科	5 名		
11B	8 名				
12A	7 名				
	合計 55 名		合計 209 名		合計 34 名
		救急科	10 名	発達, もぐもぐ外来	9 名
		集中治療科	8 名	一般外来	3 名
初診患者数	合計 273 名		合計 18 名		合計 12 名